

日本における教職課程担当教員養成プログラムの比較・分析
—広島大学「教職 P」と玉川大学「教師教育研究コース」を取り上げて—

【発表構成】

0. はじめに
1. 広島大学「教職 P」
 - (1)プログラムの概要
 - (2)開講授業
 - (3)カリキュラム構造
2. 玉川大学「教師教育者研究コース」
 - (1)プログラムの概要
 - (2)開講授業
 - (3)カリキュラム構造
3. 考察
4. おわりに

0. はじめに

本発表は、広島大学における「教職課程担当教員養成プログラム」(以下、「教職 P」と略記)と玉川大学における「教師教育学研究コース」、これら2つのプログラムで開講されている授業やカリキュラム構造の比較・分析を通して、それぞれのプログラムが育成しようとしている教師教育者像を明らかにし、教職課程を担当する教員を養成するプログラムの類型化を図ることを目的とする。そこで以下のような RQ と SQ を設定する。

【RQ】 教師教育者を育成するプログラムはどのように類型化することができるか。

【SQ①】 広島大学「教職 P」が育成しようとする教師教育者とはどのようなものか。

【SQ②】 玉川大学「教師教育学研究コース」が育成しようとする教師教育者とはどのようなものか。

1. 広島大学「教職 P」

(1)プログラムの概要

本プログラムは、広島大学大学院教育学研究科人間科学専攻(博士課程後期)が平成 19 年

9月から平成22年3月にかけて実施した「Ed.D型大学院プログラムの開発と実践―教職課程担当教員の組織的養成―」（平成19年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム）を前身とし、これを継続・発展させるべく平成22年4月から新たに「教職P」として設置された。教育学人間科学専攻の教育学分野を中心とする博士課程後期院生を受講の主な対象とし、「教員養成学講究」「大学教授学講究」「教職プラクティカム」「教職ポートフォリオ」、これらの授業を通して“先生の先生”（教職課程担当教員）としての資質・能力を組織的かつ計画的に養成することを目指している¹。

(2)開講授業²

○教員養成学講究(Iセメ)

大学教育の歴史や国際比較を通して日本の大学教育の特色や意義・課題をとらえ、他大学で実施されている「教職に関する科目」のシラバスや各講義で使用されるテキストの分析を行い、まとめとして教職関係の授業科目を1つ取り上げて15回分のシラバスを作成する。

○大学教授学講究(IIセメ)

Iセメの「教員養成学講究」を踏まえ、「大学における講義のあり方」に関する基本的原理と実践課題をまず捉え、次セメ以降実施される「教職プラクティカム」を見据えて受講者自身が大学の教壇に立って講義を行う具体的な場面を想定しながら、大学での講義方法や講義形態に焦点を当てた「大学教授法」について学ぶ。

○教職プラクティカム(III～Vセメ)

I・IIセメでの「教員養成学講究」と「大学教授学講究」で習得したことを基に、大学での教壇実習を通して教職課程担当教員としての実践的力量的形成・向上を図る。III・IVセメの実習は学内で行い、Vセメの実習は学外で行う。各実習は「事前検討会」→「教壇実習」→「事後検討会」を一連のサイクルの中で行い、これを螺旋的に3度実施する。

○教職教育ポートフォリオ(VIセメ)

「教員養成学講究」「大学教授学講究」「教職プラクティカム」を終えた後の総仕上げとしてこの授業は位置づけられる。自己の大学における授業理念と自己評価についてまとめ、それまでのプログラムを通して自身が身につけた学習成果をポートフォリオとしてまとめる。そして担当教員らの審査を経て、これに合格することで「教職P」の修了が認定される。

¹ 森下真美『平成25年度「教職課程担当教員養成プログラム」教育・研究活動報告』広島大学大学院教育学研究科教職課程担当教員養成プログラム、2015年

² 具体的な講義の内容は『「Ed.D型大学院プログラムの開発と実践―教職課程担当教員の組織的養成―」最終報告書』広島大学、2010年 p.8-31を参照した。

(3)カリキュラム構造

では、これまでに見てきた「教職 P」で開講される授業はどのように配列されているのか。教職 P のカリキュラム構造の特徴として、ここでは 2 点指摘したい。

1 点目は、博士課程前期での学びを基盤とし、博士課程後期の 3 年間で大学教員としての実践力向上に向けて組織的・段階的に構造化されている点である。博士課程後期 1・2 セメの「教員養成学講究」「大学教授学講究」では、後の「教職プラクティカム」に向けて、シラバスの分析・作成の視点や方法を習得し、大学での教授法について学ぶ。これらを活かしてⅢ～Ⅴセメで学内・学外にて教壇実習を行い、Ⅵセメでそれまでの学びの成果をポートフォリオとしてまとめる、といったように少なくとも 3 年(博士課程前期も含めると 5 年)の歳月かけて大学教員として求められる実践的な指導力の育成を企図した編成であるといえる。

2 点目は、Ph.D 学生として求められる確かな研究力の育成のために、博士論文執筆に向けた各自の研究も「教職 P」と同時並行で進められているという点である。大学教員として求められる実践的な指導力の育成に傾倒することなく、従来の Ph.D 学生として求められる確かな研究力もプログラムと並行して育成しようとする編成であるといえる。

以上のことから SQ①に答えると以下のようなになる。

【SA①】

「教職 P」では 3 年間の組織的・段階的なカリキュラムの中で、大学教員としての実践的な指導力と研究者としての確かな研究力の両方を持ち合わせた教師教育者の育成を企図している。

2. 玉川大学「教師教育学研究コース」

(1)プログラムの概要

玉川大学の「教師教育学研究コース」は、日本初の教師教育に関して専門的に教授研究を行う専攻コースとして、平成 26 年度 4 月から同大学院教育学研究科教育学専攻修士課程に設置された³。本コースでは、教師教育学に関する研究と教育を行い、大学や大学院の教職課程専任教員、教職大学院専任教員、教師教育学研究者の養成を目指している。

コースの担い手としては、校長や教育長・幹部教員など、豊富な現場経験を活かして将来は大学教員として教員養成に携わることを目指す人を主な対象としている。

³ http://www.tamagawa.jp/graduate/news/detail_6668.html 「玉川大学 HP」(5 月 24 日最終閲覧)

(2)開講授業⁴

○教師教育学研究(春セメ) <必修>

教員養成・研修，教員の生涯成長・ライフコースの設計に関する教師教育学の知見を総合的に学び，教師教育学研究コースにおける研究の基本を習得し，研究の全体を把握することを目指す。

○教職課程マネジメント研究(秋セメ) <必修>

大学における教職課程を経営・運営するために必要事項を総合的に学ぶ。教職課程の目的と役割，教職課程を構成する法令の理解，教職課程カリキュラムの構造，大学における教員養成組織の設計など，教職課程に生じる具体的問題を中心に扱う。

○高等教育制度・政策論研究(春セメ 集中) <必修>

今日の高等教育制度の在り方に関して，変革が議論される機運を教員養成課程にも具現化するべく，教員養成と大学・高等教育制度・政策全体との関係に焦点を当て，現在の高等教育制度・政策の特徴と大学の変容について考察する。

○教師教育教授法「社会」(秋セメ 隔年開講) <必修選択>

社会科・地歴科・公民科について，大学における教職課程カリキュラムに関する教授法を研究する。教育職員免許法に規定される「教職の科目」を対象として，科目そのものの目的，大学講義で教授する内容，教授の方法や評価，学生指導の在り方について，将来的に教職課程担当者となる立場を前提として研究を行う。

○教育学特別演習Ⅰ～Ⅲ(各セメスターで開講) <必修>

修士課程での研究生活の中心となる科目であり，教育学研究の基礎となる方法論を学ぶことを目的とする。受講者は自身の研究テーマに即した教員が開講する演習を選択し，修士論文の執筆に向けた指導を受ける。(ゼミに該当)

(3)カリキュラム構造

「教師教育学研究コース」で開設されている授業の配列にみられる特徴について，ここでは1点指摘したい。それは授業の連関があまり強く意識されていない点である。広島大学の「教職P」では，Ⅰセメで「教員養成学講究」，Ⅱセメで「大学教授学講究」といった

⁴ 授業の内容・開講時期については，以下の URL をそれぞれ参照した。

・ http://www.tamagawa.ac.jp/graduate_guidebook/2014/pdf/101-111.pdf 「授業内容」(5月24日最終閲覧) 授業の抽出に関しては，①必修科目であること②社会科教師教育に関する科目であることの2つの視点から行った。

・ http://www.tamagawa.ac.jp/graduate_guidebook/2014/pdf/097-100.pdf 「教育学研究科教育学専攻修士課程 教育課程表」(5月24日最終閲覧)

ように、大学のプログラムが提示する通りに履修することで教職課程担当者としての資質・能力を育成する構造であった。しかし、玉川大学の「教師教育学研究コース」では、春セメ(IセメかIIIセメ)で「教師教育学研究」、秋セメ(IIセメかIVセメ)で「教職課程マネジメント研究」といったように、修士課程2年間の内に履修すればよいという比較的柔軟性を持った履修構造になっている。

このことから開講されている授業は「教職P」のように授業の連関をそこまで強く意識はせず、2年間で総合的に教師教育学について学ぶ構造になっているといえよう。本プログラムが豊富な現場経験を有する教員を主な対象としているということを鑑みると、現職教員でも授業の履修が可能なのにある程度の柔軟性を持たせているものと推察できる。

3. 考察

本発表で取り上げた「教職P」と「教師教育学研究コース」はともに、教員養成課程を担当する大学教員を育成することをねらいとする点で共通している。しかし、「誰を」教師教育者として育成しようとしているか、プログラムが想定している受講者に着目すると2つのプログラムの間には根本的な相違が見て取れる。具体的には、「教職P」は“研究者(博士課程後期院生)”を教師教育者として育成しようとするプログラムであるのに対し、「教師教育学研究コース」は豊かな学校現場経験を備えもつ“実務家としての教師”を教師教育者として育成しようとするプログラムであるといえる。

プログラムの内容について両者を概観すると、「教職P」では博士課程前期までの学びをベースに、博士課程後期でシラバスの分析方法や作成方法、大学教授法について理論的に学び、それに基づいて受講者自身が作成した指導案に基づいて教壇実習を行うことで大学教員として求められる実践的指導力の向上を目指す。それに対して、「教師教育学研究コース」では豊かな現場経験をベースに、教師教育のみならず、大学の制度・政策的内容も学びつつ大学の教職課程を運営する力を2年間かけて身につけさせることを企図している。つまり「教職P」では、大学教員として研究力と実践力を統一的に育むことをプログラムの目標にしているのに対し、「教師教育学研究コース」ではそれまでの豊かな学校現場での豊かな経験と大学院で学ぶ理論を融合させ、それによって教師教育者として成長させることを目指していると考えられる。

以上のことを踏まえて、SQ②とRQについて答えるならば、次のようになるだろう。

【SA②】

「教師教育学研究コース」では自身のもつ現場経験をベースとし、2年間の修士課程の中で現場経験と大学院で学ぶ理論と融合させることによって、豊かな現場経験を基盤としながら現実的で組織的な大学運営を行うことができる教師教育者の育成を企図している。

【RA】

教師教育者の育成に当たっては，“研究者”を教師教育者として育成するプログラムと，“実務家としての教師”を教師教育者として育成するプログラムといった大きく2つの類型化が可能である。

4. まとめ

本発表では、広島大学と玉川大学のそれぞれの教師教育者養成プログラムについて、教師教育者になる対象に焦点を当て“研究者(博士課程後期院生)”を教師教育者にするプログラムと“実務家としての教師”を教師教育者にするプログラム、という視点から類型化を図り、講義やシラバスを分析することを通してそれぞれのプログラムが育成しようとしている教師教育者像の明確化を試みた。

「教師教育者を養成するプログラム」と一言で表現しても、そのプログラムの受講者が研究者であるのか、それとも教師であるのかによって、彼らのベースにあるもの明らかに異なる。そのため、実際の教師教育者のプログラムの開発にあたっては、プログラムの受講者のベースに応じて開発を行う必要があるだろう。

尚、今回の発表で取り上げた玉川大学の「教師教育学研究コース」は平成26年度4月から開講され、まだ第1期修了生もいない比較的新しいコースであるため、今回の発表は玉川大学HPや広報資料、授業運営部署への聞き取り調査によって得られたごく限られた情報で構成されている。そのため「教師教育学研究コース」についてはさらに詳細に見ていく必要があるということを最後に述べておく。